

報告番号

※

第

号

主 論 文 の 要 旨

論文題目

江戸幕府の歴史編纂事業に関する研究
—創業史の分析を中心に—

氏

名

平

野

仁

也

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、近世日本において、江戸幕府により行われた歴史編纂事業について、その実態の解明を目的としたものである。

日本史上、近世期は、諸文化の向上が著しい時代であった。近世前期から後期にかけて、幕府によって多くの歴史編纂事業が遂行されたが、本稿は、その中でも武家の「創業の歴史」がどのように調べられ、叙述されたかという点に着目して研究したものである。

考察の対象としては、綱吉政権下において成立した『武徳大成記』、近世後期にあしかけ23年という長い年月をかけて完成した『朝野旧聞哀藁』、諸大名・旗本家から幕府へ提出された家譜類である『寛永諸家系図伝』『貞享書上』『寛政重修諸家譜』などが挙げられる。

本稿では、従来の研究を深化させるため、①先行する書物との関係を重視した考察、②同時代史料を適宜用いた編纂過程の分析、③創業史が有する特性への理解、以上3つの視点を軸に、幕府の編纂事業について詳細に検討した。本研究の構成については次の通りである。

第1章「徳川幕府の『寛永諸家系図伝』編纂事業と諸家の動向」では、『寛永諸家系図伝』編纂にあたって、幕府の命を受けた諸家がどのような動きをみせたか、福岡藩黒田家・萩藩毛利家・加賀藩前田家などの諸家や、林道春など幕府の編纂関係者の動向を分析し、系図作成の実態を明らかにした。

第2章「『寛永諸家系図伝』編纂過程における呈譜の改変」では、『寛永諸家系図伝』編纂の規準を示した史料について検討するとともに、『寛永諸家系図伝』の未定稿と考えられる史料群（岡谷本）を紹介し、諸家の呈譜がどのように改変されていたか、その様相を解明した。

第3章「『貞享書上』の提出をめぐって」では、重要な史料でありながら、その成立状況について、従来ほとんど研究の蓄積がなかった『貞享書上』に関して、書上作成

時における諸家の動向や書上が有する史料性格について考察した。

第4章『武徳大成記』の成立と徳川創業史の近世的展開」では、幕府編纂の創業史である『武徳大成記』が、同書に先行する歴史書『松平記』『三河物語』をどのように取り入れて成立したか、その様相について相互のテキストを比較検討する中で明らかにした。

第5章『寛政重修諸家譜』の呈譜と幕府の編纂姿勢 一島原藩松平家の事例から一」では、『寛政重修諸家譜』編纂の実態について、島原藩松平家の事例に基づき、編纂の過程、幕府の同書に対する編纂姿勢などを具体的かつ詳細に検討した。

第6章「近世における家譜史料と人物 一伊奈忠次像の表象と江戸幕府編纂物一」では、家康に仕え、民政方面で手腕を発揮した伊奈忠次という人物が、近世期、伊奈家作成の家譜類においてどのように叙述されるか、幕府の編纂事業との関係を念頭に置きつつ、その表象のあり方について分析した。

第7章『朝野旧聞哀藁』の編纂と林述斎」では、日本史学史上、高い評価を与えられている歴史書『朝野旧聞哀藁』について、編纂を主導した林述斎の人物像を検討するとともに、同書の史料性格について多面的に分析した。

上記のほか、補論として「十八世紀における家史編纂 一鳥取藩家老鵜殿長春と『鵜殿家史』一」を末尾に付属させた。同論では、鳥取藩家老鵜殿長春が自家の歴史を編纂する中で、家康との由緒を整備していく様子を詳細に分析した。特に一旦断絶した故地三河との関係を再構築する動きを捉えた。

最後に、終章では、本論の内容を総括するとともに、今後の研究展望について述べた。

以上が本研究の構成である。各章においては、それぞれの編纂事業の基礎的事項一編纂の期間、人員、過程、関連法令等一について考察しつつ、それぞれ独自の分析視角を設定して、従来の研究をより発展・深化させるよう心がけた。江戸幕府によって遂行された歴史編纂事業に関する各種の検討を通じて、政治権力によって歴史が作り上げられていく過程、政治権力と歴史叙述の関係について考察した。